
理有 炎天の刀を持つ少女

如月 理有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理有 炎天の刀を持つ少女

【NNコード】

N8599X

【作者名】

如月 理有

【あらすじ】

紅那ノ國の民は長年の圧政に苦しんでいた。その最も端に位置する村で、姿峨は理有という少女に出会い。

理有はあちこちを放浪しながら、様々な人々に出会い、己の定めを知り、やがては革命を望むようになる。

炎天の刀を持つ少女の神異記。

夜闇の中で、そこはまるで明るい星のよつに輝いている。たくさんの提灯と真ん中には大きなかがり火があつて、人々のざわめきと太鼓の音が風に乗つて流れてくるようだ。その中に、人々の楽しげな笑い声が聞こえたよつに感じて、理有はジユツと目を瞑つた。

夏も過ぎ去り、夜風も大分冷え込んできている。ぼろぼろになつた衣を一枚身にまとつただけの、5歳くらいのこの少女は、見ればがりがりにやせ細つていた。その裸足は、山の中を何日かさ迷い歩いてきたようで、傷つき血がにじんでいた。もう、一步も歩ける気がしなかつた。

（おなかがすいた……）

理有は鳥肌の立つた腕で、膝を抱え込んだ。やつと見つけた村だつた。そこへ行けば、食料が手に入るだらう。けれど、ここまで来て理有は、進む意欲を失つた。村はどうやらお祭りのようだ。だが今の理有にとって、それは遠い夢の中の出来事のよつに感じられたからだ。

（とおい、とおい世界の、おはなし）

まぶしい。理有は心の中でつぶやいて、その手で村を隠そうとした。提灯の明るさが目に痛かったのだ。けれど、村の明かりは、理有の小さな手の隙間から漏れ出してしまつた。トン、トトトン。太

鼓の音が、風にのってやつて来る。

トン、カ、トンカカ。

芒すさきが揺ゆれる 穂こが揺ゆれる
実みる実みるよ 黄金こがねの海うみだ
さあ 娘むすめたち 舞まいい踊ねれ
白しらい女神めいじんが来る前に ああ
風かぜとともに来る前に……

＜第一章＞

扉を開けて、ふたりの男が入ってきた。異国風の黒ずくめの格好で、顔を頭巾で隠しており、いささかうろんな男たちだが、周囲の客も亭主も気にしなかった。なぜならここアシロ村は、それなりに豊かで活気があり、外から来た人間に對しても寛容だったからだ。（それは、山のふもとというよりも山の中にあるといった感じの小さな村にしてはめずらしいことだった）

アシロ村には、この山を越えてイギナという港町へ向かう商人などがよく立ち寄つており、人々は外から来た人間に慣れていた。もちろん、少し離れたところには街道があつたが、国の境目となる関門があり、訳ありの人々はこの村から山越えをすることを選んだのだ。

亭主はこの人達もそういうた類の人なのだとと思うと、注文を訊ねた。そのとき、酔つた若者のひとりがいきなり立ち上がり、大声で歌いだした。

「ケツが揺れるぜ 胸も揺れる
酒だ女だ 祭りの夜だ
さあ 娘たち 舞い踊れ
白い夜明けが来る前に ああ
恐いおつ母ちゃんと来る前に」

黒い頭巾をかぶつた男の一人が、それを聞くと顔をしかめながら、

銅貨を数枚出した。「ビールを

「はこよ」と亭主は返事をすると、ダン、とジヨックキを一つおいた。後ろでは、やつき歌つていた若者が、周りの若者達に「なんだ、おまえいまだに母ちゃんが恐いのか」などとからかわれていた。

適当なテーブルに腰を下ろした黒ずくめのひとりが、頭巾を下ろした。現れた顔は意外と幼く、少年から若者になつたばかりというやうだった。16・7歳といつたところか。明るい茶色の髪に色素の薄い瞳、そして端正な顔立ちに不快な表情を浮かべている。

「まつたく、騒がしそぎますよ。よつこむよつて祭りの田に当たつてしまふなんて。ねえ、如月さん」

如月さん、と呼ばれた男は頭巾を下ろす、うなずきもしなかつた。ただ腕組をして、何かを考え込んでいる様子だ。田の前の若者は慣れているらしく、話しかけるのをやめてビールに口をつけた。だがまたすぐに喋り出す。

「アチッ！　如月さん、このビール熱すぎますよ。何ですかこれは！　もう……」

彼の名前は如月姿峨きさらひあじがといった。また、田の前の若者は俺おれといふ。姿峨は黙つてビールに口をつけてみた。ああ、うまいなと思った。

「どうですか？　味は？　感想は？」

ぐつと身をのり出して、俺が訊ねてくる。まるで、俺が造ったみたいだなと思いながら、姿峨は正直に

「つましいと思つたわ」

といった。

「そうですか、やつぱり！……いや、俺がやつぱりつていうのもおかしいか。あれ、でもじやあなんていつたらいいんだろう。嬉しいです？お口に合つて何よりで？？」

侑がひとりでぶつぶつと何かつぶやいているが、姿峨は一切気にせず、店の中を見回した。

店では、あいかわらず騒いでいる若者達に、周りの客が「そんなに娘がいいなら、外に出て探して来い！」といい始めた。彼らも祭りの日なので多少は寛容だつたが、いうことはもつともだつた。「ええつ」と渋る若者達は、便乗した周りの客にも「そーだ、外いつてこい」といわれ、にやにやする大人たちによつて店から追い出された。祭りは既に終わつていたが、村は余興に包まれていたので、外にはまだあの若者達のような人がたくさんいるのだろうと予想がついた。

その瞬間、ガシャーンという音と共に、人々の悲鳴が上がつた。いきり立つた怒鳴り声もする。どうやらこの店のすぐ前で起こつていることのようだ。周りの客も、なんだんだと立ち上がつた。

喧嘩か。と、姿峨は予想をつけた。ひとりが店から出て行き、それに釣られて何人もが野次馬をしに出て行つた。侑も立ち上がりつきょろきょろしていたが、姿峨が落ち着いた様子でビールに口をつけるのを見ると、再び座つた。そして、脱力した様子で腕に頭をのせた。

「ハアー、やつぱり騒がしいですね。さすがは如月さん、微動だにしないし」

姿峨は、この若者に好感を抱いていたが、思つたことをすぐに口にじすすぐるとこらが問題だと思つていた。そのとき、外の怒鳴りあう声が聞こえた。

「このひ、くそガキが！ 泥棒猫め！ どこから来やがつたんだ！」

「ハンッ、どうせ親に捨てられたんだろう？ ああ、可哀想に、なあつー！」

ドカ、ボクツと殴打する音が聞こえる。さらにその周りから、やつちまえといつたはやし立てる声がする。姿峨はまゆをしかめた。外からさらりと声がする。

「うぬせこつ！ ぼくは捨てられたんじゃない！ 放してよー！」

「気になつた点はひとつ。

「子どもか」

姿峨はビールを置くと、ゆっくりと立ち上がり、俺はその動作で察したよつて、ぐだつていていた体を起こすと、何もいわずについてきた。

外に出ると、かなりの野次馬が集まつていた。そして、野次馬に囲まれた中で、数人の大きな子どもたちが、小さな子どもを集団でいたぶつていた。周りの大人たちはざわついていたが、止めようとする者はいなかつた。むしろ煽り立てる者さえいる。どうやら、こ

の村の子供ではないらしい。

「うむむむこだと？ よくもその口でいえるなー。泥棒猫の分際でー。」

そのと並、小さく子供が殴られながらも、田舎をしつく見開いていつた。

「財布くらい、ちゃんと自分で管理できないのが問題なんだ。なんでもかんでもお母さん頼つてるからだ」

見た田は5歳ほどだらうか。随分と、歳のわりに大人びた物言いをすると婆娘は思った。

それは、あまりのことに、周りの子供もたちは一瞬口をあんぐりと開けて、殴る手を休めてしまったほどだ。しかしそれは直後に、二倍の威力となって小さい子供にも降りかかることになつた。

「なんだとー？」

「いの、生意氣なーー。」

そこには、わざと今までのいたぶつて遊ぶような影はなく、子供もたちの田は本氣でじきり立つていた。舌を噛んだらしく、殴られている子供の顔面に赤い血が舞つた。

「や！」まだだ

↙第1章↙ 如月姿儀（後書き）

評価、感想、ビシビシお願こしもす！！↙↙

政府の、犬

姿峨はそういうと、殴っていた子どもの腕をひねり上げた。子どもは、なにすんだよ！ と騒いで暴れたが、姿峨はあっさりと押さえつけてしまった。そして、同時に空いているほうの手で短刀を掴むと、他の子ども達の方へと突きつけた。今まさに姿峨に飛びかかるとしていた子ども達は、驚いて動きを止めた。本当なら、今押さえつけている子どもを人質にでもとつて脅せば最も簡単だが、子どもの喧嘩程度であることではなこと、たすがの姿峨も考えた。

「ゆき
侑」

姿峨はつぶやくと、いまだに壁に寄りかかったまま突っ立つている、小さい子どもの方を顎でしゃくつた。指示を理解した侑は、その子どもの方へ寄つて行くと、しゃがんで目線を合わせた。

「怪我はだいじょうぶかい？」

それは優しい声音だった。警戒心が薄い。優しいやつだ、と姿峨は心の中で肩をすくめた。

「え？ ……ううん、だいじょうぶ」

子どもが、かわいらしく頷いた。まるで、さつきまでとは別人のようだった。それを見て、姿峨の心にある疑念が浮かんだ。

しかし、それを掴む前に、自分が押さえつけていた子どもが動いた。完全に、よそ見をしていた不意をつかれたのだ。姿峨は心の中で舌打ちをした。子どもだと思って、油断していた。だが、しょせ

ん子どもがでたらめに手足を振り回しているだけ。姿峨は余裕で全ての攻撃を受け流し、再び身動きが取れないようこなした。そのとき、腰に差していた短刀の一本が抜け落ち、カン……と音を立てたが、姿峨は気にしなかった。

はつ、と後ろで息を呑む音がした。

「お、お、まえ、達はつ」

高い子どもの声。

「どうしたんだい？」

侑の訊ねる声。

一瞬の空白。そして、空気が割れるような緊張と衝撃。次の瞬間、いじめられていた小わい子どもは叫び声を上げていた。

「触れるな！ 政府の犬が！」

ざわつと野次馬がざわめいたのを感じた。

(政府の、犬ね)

姿峨は苦い思いに顔をしかめた。

「な、なぜ、そんな。どうして分かつた？」

訊ねる侑の声もだいぶん動搖している。ふと、姿峨は思い当たつた。

「その、短刀のもようが……」

やはりか、と姿峨は思った。さつき、姿峨が腰から落とした短刀にはある紋章が入っている。だが、まさかこんな子どもが知つているとは。意外だった。

「政府の犬つて、まさか」

誰かがつぶやいた声がした。野次馬達の視線が、姿峨と俺にふりそそぐ。それは決して快い視線ではない。敵意のこもつた視線だ。

「そう！　おまえ達のせいで、僕はこんな目にあつてるんだ。親を返してよ！　こいつらが裏でいつたいどんなことをしてきたか。じやまな人間と見ればすぐに殺して、人々を恐がらせて。こいつらが悪いんだ、ぜんぶぜんぶ！　政府のいいなりになつて、いくらでも人を殺す悪党達なんだから！」

「黙れ！…」

何が逆鱗に触れたのか。姿峨は自分でも驚くほど頭にきていた。小さい子どもに飛びかかると、腰に差した刀を抜きざまに切りつけた。

(- 避けられた?)

だが、所詮子どもが、鍛錬を積んだ姿峨に勝てるはずもなかつた。ほんの2・3秒で壁に追いつめると、姿峨は子どもを見下ろした。

そうして初めて、頭から水をかぶせられたように姿峨は冷静に戻

つた。それは来たときと同じようにあつといつ間の出来事だつた。目の前で吼えていた子どもは、ほんの小さな子どもだつた。斜め後ろで、侑が面食らつてゐるのが分かる。群集がざわめき立つてゐる。姿峨は再び子どもを見下ろした。子どもは姿峨が見て初めて、その顔に恐怖を浮かべていた。そこから首筋に目を落とし、子どもが何かを首に下げてゐるのを見つけた。それはなんでもない革紐だつた。にもかかわらず、姿峨はなんだか胸騒ぎを感じてその革紐に手をかけた。

「あつ」

子どもが叫び声を上げる。姿峨はかまわず、それを子どもの首から奪い取つた。「返してよー。」

姿峨は子どもの抗議を片手で制すと、革紐につながつてゐるものを見て眉根を寄せた。それは大きめの勾玉だつた。くすんだ緑色をしてゐる。

ふう、と息を吐いた。確信してゐた。こいつは、ただの子どもといつて、見過ごしていいものではない。

姿峨は勾玉をポケットに入れると、子どもをじつと見下ろした。子どもは、姿峨の足にむしゃぶりつき、殴つたり引っかいたりしていた。

「大事な物のようだな。返してほしかつたら、ついて来い」

姿峨はそういうて、その場を後にすることにした。子どもがすぐ後ろについてきた。少し間があつてから、侑があわてて追いかけてきた。その場に置きざりにされた群集は、しばらくの間、身動きを

元のことをひでれなかつた。

政府の、犬（後書き）

評価・感想、ビッシリシお願いします！^ ^

姿峨^{しなが}は村を出ると、森を歩き続けた。あと一日も歩かず、森を抜けることができるだらう。

後ろを子どもがついてきているのは知っていたが、あえて気にしない振りをしていた。まるで存在しないように無視を決め込んだのだ。小さい子どもには酷な仕打ちだらうな、という思いもかすめたが、姿峨はそんなことを気にする人間ではなかつた。次にこの子どもにどう接するかを決めるには、まず、これからこの子どもをどうするかを考えなくてはならなかつた。

夜も更け、暁ばかりになる頃に、姿峨はようやく足を止めた。森を抜けたすぐふもとは、アシロ村よりも大きな村がある。そこには夕方に着けば良かつたので、その前にここで一度休息を取ることにした。

「侑^{ゆき}、ここで休憩だ」

一晩ぶつ続けて歩いたので、侑はさすがに疲れた表情をしていたが、その言葉に元気よく頷くと、早速準備に取りかかつた。雨が降る様子はなかつたが、侑は一本の若木を寄り添うように結び付けると、口早に祈りの言葉をつぶやいてから、近くの木から枝を切り落としてきた。それを若木の周りに積んで、泥と落ち葉で簡素な屋根をつくると、簡素な家が出来上がつた。

姿峨はその間に、水袋に水を入れに行き、帰りに弓矢で鳥を一羽狩るのに成功した。そして、家に着いたとき、鳥はまだ生きていた。姿峨は鳥の首を落とそうとしたが、急に手を止めると、少しためら

つた。

(こや、あこつにやりむけみよつ)

心を決めると、姿峨は短刀に手を伸ばす代わりに、懷に手を入れた。取り出されたのは、勾玉だった。姿峨はそれを手に乗せ、もう一度じつくりとながめる。俺が起こしたたき火の光を反射して、勾玉はキラキラと光った。くすんだ縁は深い色をしていて、見方によつて、また場所によつて色が若干異なつた。

魅入られそうになるのをじらえて、姿峨は顔をあげた。この勾玉が「あれ」であるのは間違いだろう。不可解なのは、なぜこれを、あんな子どもが持つていたかだ。姿峨は目を細めて子どもを見た。子どもはたき火の光が、ぎりぎり届くか届かないかのところにしゃがみこみ、こちらをじつと見つめていた。姿峨は、ふん、と鼻を鳴らした。ひとつ、あいつを試してみよつ。

「ほり。これを返して欲しかつたんだろ?」

姿峨は無造作に、ぽいつと勾玉を放つた。子どもは大事なものを無造作に扱われて、かなり慌てたようだつたが、心配ない。勾玉は一切の狂いなく、しっかりと子どもの手の中に落ちた。子どもは、ほうつと安心したように息をついた。

「ちよつと、こひに來い」

手招きをするが、子どもは警戒した様子で近寄つてこない。イライラした姿峨は、「来い!」と、有無をいわぬ口調でいった。子どもはびくつとふるえると、勾玉を両手でしっかりとぎつて、おそるおそる近寄つてきた。近くまで来ると、姿峨は「座れ」といつ

た。子どもは、姿峨の手が届く範囲に入らないように用心しながら座つた。たき火の炎が、子どもの頬を照らした。姿峨はそこで、初めてこの子どもが少女だったことに気がついた。今まで、その口調と振る舞いにだまされていたのだ。けれど、今さら女の子だらうと大して違ひはない、と姿峨は考えた。あえて上げるなら、この先訓練することがあつたときには、男子よりも体力が劣るのが問題か。姿峨は子どもをじっと見据えていた。

「おまえ、鳥をさばいた経験は」

「ある」

子どもは、ちらりと姿峨を見上げた後、ぶすっとした調子でいった。

「やつてみる」

姿峨はそうこうと、子どもの前に鳥と短刀を置いた。そこへ、俺が「なになに、子どもにやらせてみるんですかー？」

と、興味をしめしたらしく、近寄ってきた。子どもの近くにしゃがみこみ、じつくつと見る体制にならうとした。しかし、やじでつきなり、俺が素つ頗狂な声を上げた。

「え、ええーー?ーー? うわーー!」

姿峨はため息をつきながら、一体どうしたんだと訊ねた。

「あ、如月さん、大変ですー! いの子、いの子女の子ですよー!」

姿峨はその返事を聞き、眉間にしわを寄せた。ああ、なんだそのことかと思つた。

「それがどうかしたのか？」

「ええ！？　どうかした、って……。どうかしたって、いや、大問題ですよ！――」

「いや、だから何が大問題なんだ」

侑はまだ何かいつている。だが、姿峨は（まつたく……）と思うと、田の前の子どもに視線を戻した。子どもは困惑している様子だった。けれど、姿峨が先をうながすと、文句をいいたげに見あげてきたので、にらみ返してやつた。しぶしぶといった様子で、子どもがゆっくりと鳥に手を伸ばす。そして、触れたところで、びくっと体をふるわせて手を離した。

「……あつたかい」

姿峨は肩をすくめた。

「わつやわつだらう。わつき狩つてきたばかりだ。まだ生きている

「わづ、と子どもがつめこた。

「やつたことがあるんだらわづ、わつわつやつて見せてみる」

わづと突き放すよつこつと、子どもは短刀を手ににぎわつた。しかし、その手は頼りない。鳥が最後の力をふりしぼって、ばたばた

とあはれた。子どもは悲鳴をあげて、鳥から手を離した。だが、姿峨は何もいわずに、見守ることにした。

子どもは、悪戦苦闘していたが、やがて鳥の首をつかむと、短刀を押し当てた。そして、力を込める前に大きな声でいった。

「田の神月の神、森の神々よ。この鳥の魂がどうか安らかに眠らんことを！」

短刀は鳥の首をすばりと切り落とし、鮮血が飛び散った。子どもは、痛みをこらえるように顔をゆがめていた。

（田の神月の神、森の神々、か）

姿峨は子どもの祈りを心の中で反すつしていた。それは、ここにのとじり聞かなくなつた、古い祈りだった。

子どもは、鳥の足を持つと、逆さにして血が抜けるのを待つた。抜け切ると羽をむしり取り、それが終わると内臓を抜きにかかつた。姿峨は手伝おうとしたが、子どもに断られた。慣れてはいないうで、子どもの作業はのろく至らない点多かつたが、けつときよく、子どもは最後まで一人で鳥をさばきつたのだった。

田はすでに昇りきつていた。子どもは川に手を洗いに行つてはいる。姿峨はたき火で熱くした石を使って、皮の袋で調理をしてはいる。ここまで来る間に摘んだ山菜と子どもがさばいた鶏肉を使って、シチューをつくるつもりだった。そこへ、子どもがいない隙を見計らつて、侑が声をかけてきた。

「すいこ子ども……でしたね」

そうだな、と姿峨はいった。

「気に入ったのですか？」

「ああ。見込みはある。田影の館に連れて行って、鍛えようと思つ」
それに、勾玉のことも気になるしな、と姿峨は心の中で付け足した。なんにせよ、いろいろと気になる子どもだった。

子どもが帰つてきたころには、シチューはいい感じに出来上がりつていた。いいにおいが辺りにただよつていて、空腹のお腹に食欲を誘つた。さらに、もも肉を串に刺してたき火で直接焼いていたのが、それがキツネ色になつて脂をしたたらせているのがたまらなかつた。3人は日々にいただきます、と感謝すると、食事に取り掛かつた。木の器によそつたあつあつのシチューも、鶏肉のうまいがよく出ていた。子どもも、ほっぺを赤くしておいしそうに食べていたのを覚えている。

食べ終わると、3人はすぐに横になつた。子どものぶんの紙子*はなかつたので、自分の分をゆずると、姿峨は丸くなつて寝こころがつた。寒かつたが、眠れないほどではなかつた。眠りに入る直前、姿峨は子どもの名前を聞き忘れたなあとぼんやりと思つた。

運命の歯車が、かちりと音を立てて回り始めたよつた、何かが始まると予感があつた。

鳥（後書き）

* 紙子・・・紙子紙という和紙で作った衣。保温性にすぐれる。奥の細道で芭蕉も使っていた。

理有は拗ねていた。

「おなかがすいた」

理有は腕を組んで、つんとして見せた。

「そこをなんとか、ガマンして」

彼の言葉に、くちびるをゆがめる。胸の辺りがひどくむかむかして不快だ。

「つかれた」

「もーちゅうどだから。せつとすべに帰つてくるから」

理有たちは今、門の前に立つて居のだが、足はしごれてくるわ、人が多いわ……。

そう、人が多いのがいけないのだ。うるさいし、なんだか蒸し暑いし、なぜだかみんなじろじろとこちらを見てくる。何がそんなにめずらしいのだ。おなかすいたし。というか、そもそも、

「姿峨はいつになつたら帰つてくるんだーーー。もつやだーーー。侑とふたりきりだなんてたえられないよーーー。」

「…………。俺だつて、こんなガキとふたりきりだなんてこいつちか

「ほんと……」
「まつたく、如月さん、早く帰つてきてくださいよ、
ら願い下げだ！」

ふたりの魂の叫びがじつにやる氣の無いため息とともに流れ出た
とき。

「なんだ、おまえたち。ずいぶんと俺の帰りを待ちわびてくれていたようだな。めずらしく」と

後ろから、
聞きなれた低い声がした。

「あ、如月さん！」

「あつ、姿峨———！」「

侑のわきの下をぐぐり抜けて、姿峨のふとじろに飛び込んだ。

「姿峨、聞いて！ 侑つたらひどいんだよ。あのね

理有は姿峨に抱きついて、今までのことを姿峨に告げ口しようとした。が、それを侑がさえぎった。

「何がひどいんだ！ 僕があれだけ気を使ってやつたのに！ むしろひどいのはおまえだろ」

「だつて偽つまんないし

「なにおーーー?ー? おまえ、ガキのくせに生意気なんだよ!」

「あのー」姿峨が、ふたりのガキの口げんかの仲裁にまわろうと口

を開いた。

「ふたりとも。わかつたから 」

だが、その瞬間ふり返った理有と侑は、同時にそもそもの原因を思い出し、その矛先を姿峨にむけた。そして、同時に叫んだ。

「そもそも！ 姿峨さんが遅いのがいけないんです……」「そもそも！ 姿峨が遅いのがいけないんだよ……！」

ふたりのあまりの気迫に、姿峨は思わず一歩下がると、「はあ」とため息をついた。

ちゅーっと吸い上げると、あまい汁が口じゅうに広がった。「ぐぐんと飲み込むと、今度はその冷たさが胸から全身に染み渡つてゆく。口にはわっさのあわさと、何ともいえない香ばしい果実の香りが残つていて。せつきの快感をまた味わいたくて、理有はまたストローから汁を吸い上げた。

一気に半分ほど飲み干したところで、理有はやつとまわりの状況を感じられるようになつてきだ。姿峨と侑が話している。どうやら、せつきの門の中で何があつたかを、姿峨が侑に話してくるようだ。あまりいい内容ではないらしく、ふたりとも氣難しそうに眉間にしわが寄つていて。だが、理有が見ていることに気がつくと、ふたりは話すのをやめて、じらじらを見てきた。

「つまいか？」

という姿峨の問いかに、理有は満面の笑みを浮かべた。

「「」の汁、すつ「」ーへつまー..」

「汁じゃねーよ」と、侑が苦笑しながらのぞき込んできた。「ジュースだ、ジュース。ずいぶんと夢中になつて飲んでいたな

理有は、なんだか子どもだとバカにされたよつた気がして、くちびるを尖らした。そして、ふと侑のジュースが既に空なことに気がついた。

「くふふつ。そんなことって、侑のはすでにカラじゃん!..」

それに対しても侑がなにかいい返そつとしたのを、姿峨がさえぎつた。

「まあ、おいしかつたよつで何よりだ」

じつはあの後、長く待たせたお詫びだといつて、姿峨がジュースをおいじつてくれたのだ。冷たく冷やされた、異国のものだといふれば、さまざまものが行きかつ都だからこそ手に入る貴重な物だつた。

「あ、そうだ」

何かを思いついたらしく、姿峨がふといふをさまぐつた。そして、きつちりと折りたたまれた紙の束と筆を取り出すと、さらさらと何かを書き始めた。書き終わるときつちり封をして、理有に手渡した。

「都での用事も終わつたし、これでやつと月影の館に向かえる。理有にはそこで訓練を受けてもらつが、月影の館に着いたら、総長であるヒヨノのところへこの手紙を持つていけ。あと、いいか、これ

から名前を聞かれたときには、如月理有と答えるんだ

姿峨の言葉に、理有はつなずいた。理有が如月理有になろうと、大した違いはないと思った。理有は手紙をふところにしました。

「さて、行くか」

そういうて、姿峨と侑は立ち上がった。

「ま、待つて」

理有はあわてて残りのジュースを口に含んだ。

「よしよ、月影の館に向かうのだ。

◀第2章▶ 如月理有（後書き）

評価お願いします m(ー) m

民宿の朱那

月影の館といつのは、じつに山奥にあつた。

「……これが、館？」

理有はまゆをひそめて姿峨を見あげた。どうみても、小屋だ。小さいといつほど小さくもないが、少しも大きくなくて、なんと言つか……民宿だつた。館というのがどんなものかいまいち分かっていなかつたものの、少なくとももう少し大きくて立派なのを想像していいた理有は、ため息をついた。

それを見て、侑が、くすつと笑つた。

「なにがおもしろいんだ」

理有が不機嫌に見あげると、侑は慌てて笑みを押し隠した。

「別に、なんでもないさ」

姿峨は何のためらいもなく、その”館”に入つていつた。入ると、受付のような場所があり、くだびれた男がひとり座つていた。人が入つてきたときは顔を上げたけれど、なにもいわずに黙つている。

「103号室」

姿峨が男に向けていつた。

「何泊？ 用件は？」

男が不機嫌そうに問う。

「3泊。きのこの採取かな?」

姿峨の声に、少しおもろがるような色が含まれたことに理有は気がついた。男は值踏みするよつじぎりうと姿峨を見たあと、後ろをふり返り、

「おい、朱那、こいつらをちょっと」

といった。すると、「はーい」と明るい声がし、奥からのれんを押し上げて可愛らしい少女が現れた。15歳ほどだろうか。明るい笑顔が印象的で、洗い物でもしていたのか、濡れた手をエプロンで拭っていた。だが、その瞳がこちらを見ると、一瞬揺れたようだつた。理有は違和感を感じて、首をかしげた。

(たぶん、見てたのは侑だ)

そう思つて、理有は侑のほうをそつと見あげたけれど、侑はそっぽを向いていて、表情には何の変化もなかつた。

「103号室ですね？ 私がお連れいたします」

朱那のその声や表情には、さつき一瞬瞳が揺れたことなど、まるでなかつたことのようになつてゐる。

理有たちは朱那について廊下を歩いた。木の板を敷き詰めてある床は、歩くたびにきしきしきと音がした。

「すみません」

それは一番奥の部屋だった。ふすまを横に押し開くと、畳の部屋があらわれた。理有たちを先に入れ、ふすまを閉めると、朱那が口を開いた。

「まず、身分の証明を上

それは、今までの声と違い、うつて変わった低い声だった。

姿峨は腰につけた短刀を前に出す。それは、前に理有が騒いだ、政府とのつながりを示すものだ。

「他のふたりはないのなら、血を

無感情な冷たい声で、朱那は驚くべきことをいつた。

(血?) 理有は、驚いて目を見開いた。本當なのだろうか?

だが、侑はうなずくと、目の前で短刀で自分の指先を突いた。侑の真っ赤な血がにじみ出てきて、短刀をいくらか伝うと、朱那が出した器に数滴したたつた。

理有は助けを求めるように姿峨と侑を見たが、どちらも田をあわせてはくれない。それで、これは自分で解決しなければならないんだと悟った。

卷之三

呼ぶと、侑は何もいわず、すぐに短刀を貸してくれた。理有は目

を閉じた。一度深呼吸をする。そして、目を一気に開くと、短刀を指先に突き刺した。その間は何も考えず、行為だけを行つた。やつてみると、確かに痛かつたが、それほどのものではなかつた。

「ぼた、ぼたつと血がしたたつた。」

そのとき、頭に、ぽんと手がのつた。姿峨の大きくて『じつじつ』した手だつた。

「えらいな」

そのひとことをもらえると、あとはどうでもよくなつて、理有はにっこりと微笑んだ。

それが終わると、姿峨はまつすぐに朱那を見据え、いった。

「我々は、政府の犬だ」

その言葉には、理有は知らない何かの意味があるらしく、朱那はゆつくりとうなずいた。「了解です」なにか言葉のようなものだろうかと理有は思つた。朱那は深々と頭を下げ、そしていった。

「おかえりなさい、如月様。あと、侑」

今度の声は、今までのどちらとも違い、敬意の念と深い温かみのこもつた優しい声だつた。理有はそれは大人の声だと思つた。

「ああ、ただいま」姿峨はめずらしく、少し安心している聲音でいつた。

「俺は”あと”ですか。はいはい、どうせおまけみたいなもんです
よー」

侑はぶつくさいながらも嬉しがつてゐるらしい。ふたりの安心した様子を見ていると、やはり「」が「円影の館」なのだろう。

そのとき、朱那が思いがけない言葉を口にした。

「さて。ではそろそろ円影の館に参りましょ」

理有はに、えつ！ と思つた。そして、驚きのあまり思わず、大きな声で訊ねてしまつたのだ。

「「」が円影の館じゃなかつたの！？」

それは思ったより大きな声で、部屋中に響いた。とたんに、3人がばつ、とこちらを振り返つた。理有はさらに驚いてしまい、3人の瞳を見返すばかりだった。

「静かにしろ」

姿峨のその声は、低くて威圧感があり、とても逆らつてはいけないような声だつた。理有はびくりと縮こまり、こくこくとうなずいた。何か、大声でいつてはいけないことを口にしたらしことに理有も気がついていた。そのせいしばらく、氣まずい時が流れることになつた。もしかしたら、理有がしばらくと思つただけで、実際は一瞬のことだったのかもしれないが。

それを破つたのは朱那だつた。朱那は立ち上がり、部屋の端の畳の辺りをややさまぐつたあと、畳の一枚をはがした。そして、そ

の下にある木の板もはがした。すると、下には空洞が現れた。真っ暗なので理有はまゆをしかめたが、きっとそこを通つて行けという事なのだろう。

予想は的中して、姿峨と侑と理有の3人はまもなくその空洞の中にもぐりこんでいくことになった。

空洞はトンネルになつていて、姿峨と侑は既に先に行つている。理有は暗闇が嫌で、なかなか足が進まないでいた。後ろは、トンネルの入り口から刺す明かりでまだ明るい。理有は未練がましく後ろを振り返つた。するとそこには、朱那がお辞儀をして見送つている姿があつた。理有がじつと見ていると、朱那は少し頭を上げ、小さくつぶやいた。

「侑……心配、したんだから」

それはあまりに小さい声だつたから、侑に届いたかは分からぬ。けれど、理有はなんだか、少しだけ嬉しい気持ちになつた。そして、さつきまで暗闇を嫌がつていたことなど忘れて、よつんばいのふたりを追いかけて先を急いだ。

評価をおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8599x/>

理有 炎天の刀を持つ少女

2011年11月9日03時15分発行